



Title	ポツワナ、ハンシー県におけるサン・カラハリ混住集落の分布とその形成過程
Author(s)	池谷, 和信
Citation	北海道大學文學部紀要, 44(2): 113-128
Issue Date	1995-12-22
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/33660">http://hdl.handle.net/2115/33660</a>
Type	bulletin
File Information	44(2)_PL113-128.pdf



[Instructions for use](#)

## ボツワナ、ハンシー県における サン・カラハリ混住集落の分布とその形成過程

池谷和信

### I. はじめに

わが国におけるアフリカ研究は、文化人類学的研究が中心となっており、歴史学や人文地理学の研究が不活発であることが一因となって、自然との調和を保つ未開な部族社会からなるアフリカ地域像が作りだされてきた。例えば、本稿の対象とするカラハリ砂漠は、狩猟採集民であるサン（ブッシュマン）の生活する地域として知られている（田中，1971；Tanaka，1980）。これは、カラハリ砂漠のある地点に生態系を設定し、そこでの集約調査から生まれた生態人類学の研究成果である。しかし筆者は、この地域での現地調査をすすめるなかで、カラハリ砂漠にはサンのみではなく多数の農牧民カラハリが生活していること、中央カラハリ動物保護区（以下、C.K.G.R. と略する）というメソスケールを対象にして、集落の分布とその形成過程を明らかにすることが、内外の研究でぬけおちている課題であることに気がついた。しかもこの分析を通して、生態人類学の研究成果は、この地域の歴史や地域的差異をふまえることのない特殊な状況を伝えている可能性がでてくる（Wilmsen, E. and J. Denbow, 1990）。

この研究では、イギリス保護領ベチュアナランド（Bechuanaland）の時代から、1966年のボツワナ共和国としての独立を経て、1994年4月現在までの間にわたって、ハンシー県・中央カラハリ動物保護区（C.K.G.R.）の集落の分布とその形成過程を明らかにすることを目的とする。筆者の現地調査は、

1987年、1989年、1991年、1993年(2回)、1994年、1995年の通算7回、合計して20ヵ月余りの期間を費やしておこなわれた(池谷、1989、池谷、1991、Ikeya、1993、Ikeya、1994など)。本稿では、サン語をつかつての古老からの聞きとり調査の結果の他に、各種の歴史資料や政府刊行の統計資料を使用している。

サンは、アフリカ南部のボツワナ共和国を中心に、ナミビア北東部やアンゴラ南東部に生活している狩猟採集民としてしられる。また彼らの人口総数はボツワナにおいて24,000人を示し、近隣諸国をも含めたその総数は約40,000人をこえるといわれる(Lee, 1979)。1960年代のサンでは、採集活動によって得られる植物が食生活の80%以上を占め、狩猟による肉は重要なタンパク源となっていた(Lee, 1979; Tanaka, 1980)。しかし、1980年以降のボツワナ政府の定住化政策や、国民経済の成長に伴う全国的な道路建設の促進の中で、彼らの居住地の分布や生業形態が大きく変遷してきている。例えば、C.K.G.R.の中心地カデの事例では、彼らの大部分は定住生活を営み、その生業の中心は狩猟採集から道路工事や民芸品生産への従事にうつっている(池谷、1994 a)。また、Biesele 他(1989)は、ドベ、カウリ、ハンシー、ベレ、ナタのボツワナの5ヵ所の集落において、狩猟採集、牛飼養、農耕、賃労働などに従事しているサンの社会経済状況を報告している。

このため1980年前後に出版されているLee(1979)、Silberbauer(1981)、Tanaka(1980)などのサンを対象にした民族誌の内容が、1980年代以降のサンの生活には適合しなくなっているのが実状である。上述した6ヵ所以外の現代のサンが、ハンシー県内のどこで生活しているのか、何を生業にして暮らしているのかを明らかにすることは、未解明の課題であるといわなければならない。なお本稿では、サンのみが居住する定住集落は存在しないことから、サン・カラハリ混住集落が研究対象となっている。

サンは、ボツワナ北西部のクン(!Kung)・サンやオカバンゴデルタやナタ(Nata)川、ボテテ(Botletle)川沿いで生活するリバー・サン、そこより南に乾燥もきびしくなる中央カラハリのグウィ(G/wi)・サンやガナ(G//ana)・サン、そしてその南のコー(!Ko)・サン、白人の農場に住み込み牛

飼いとして働くナロー (Nharo)・サンなど、地域ごとに言語集団が異なることは知られている。また、サンはカラハリ中央部の Tshu-khwe, Southern San, Northern San の3つのグループに分けられて、それぞれの言語集団ごとの人口が示されている (Lee, 1979)。なかでもナロー・サンは6,700人、グウィ・サンとガナ・サンをあわせて3,000人、東部の遺伝的には黒人に近いといわれるダニ・サン (Danisan) は8,000人を示すように、これら3つのグループはサンの中で人口規模が大きい集団となっている。

その一方でカラハリとは、カラハリ砂漠の縁辺部に広く居住しているバンツ系の農牧民である。彼らは、18世紀前半に移住してきたツワナに接して文化的な自立性を失ったといわれるが、カラハリ中部においてサンとの混血を数多くつくっている。

## II. ハンシー県内のサン・カラハリ混住集落の分布と3つの集落類型

筆者は、ボツワナ共和国の中西部を占めるハンシー県を研究対象として(図1)、18箇所のサン・カラハリ混住集落を確認した(図2)。図2より、大部分の集落は、ハンシーとロバツェ、ハンシーとマウン、ハンシーとマムノとの間を結ぶ幹線道路へのアクセスが容易な所に集中しているのがわかる。つまり、そこではボツワナ政府からの物質の配給や医療、教育サービスなどが、県の中心地ハンシーを経由して受けやすい場所となっている。これに対して、図2中の⑫から⑯までのハンシー県東部の集落は、ハンシーから車で8時間から12時間ばかり、県内で最も交通不便な所に立地する。

表1に示される、政府が各個人に一人一袋ずつ配給している集落別のトゥモロコシ袋の数量を指標にして、1987年10月におけるサン・カラハリ混住集落の人口分布を把握する(図2)。その結果、C.K.G.R.内の①カデ(Xade)の人口が791人を示し、カデはハンシー県内で最も多くの人口を有する混住集落であることが明らかになった。次に、500人代の人口は⑩クケのみであり、300~400人代のそれが7カ所で、200人代のそれは4カ所でみられる。

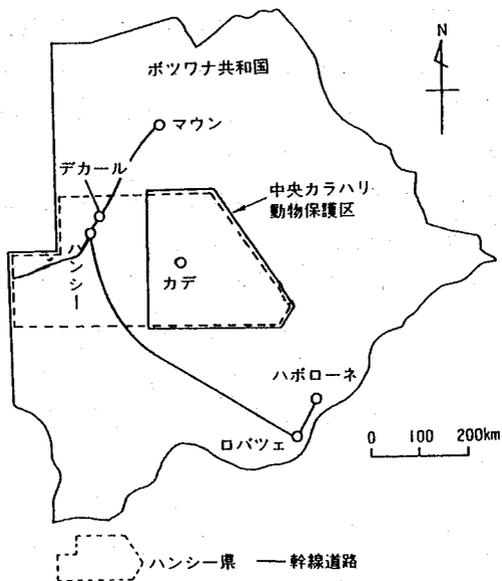


図1 調査地の位置 (出所) 筆者作成。

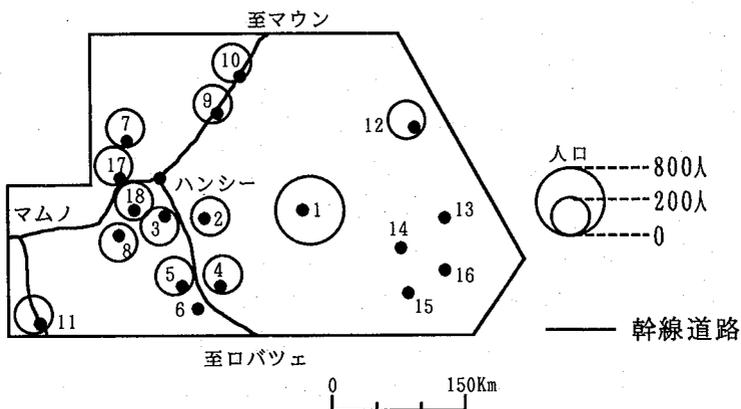


図2 ボツワナ、ハンシー県におけるサン・カラハリ混住集落の人口分布 (1987年10月)

- (注) 1 Xade, 2 East hanahai, 3 West hanahai, 4 Ka/gae,  
 5 Bere, 6 Matiao phuduhdu, 7 Grootlaagte,  
 8 Tsaawe, 9 D'kar, 10 Kuke, 11 Metsimantle,  
 12 Molapo, 13 Metsamanou, 14 Monatse, 15 Kikao,  
 16 Mothomela, 17 Western Farms, 18 Chobokwane

ボツワナ、ハンシー県におけるサン・カラハリ混住集落の分布とその形成過程

表1 ボツワナ・ハンシー県におけるサン・カラハリ混住集落の生業複合と公共施設 (1987年)

	サン・カラハリ混住集落名	狩猟	農耕	家畜の種類	道路 工事	民芸品 生産	配給されるトウ モロコシ袋の数	サンの言語集団	小学校の 生徒数	クリ ニック	集落 類型
1	Xade	○	○	ヤギ	○	○	791	ガナ, グワイ	148	○	B
2	East hanahai	○	○	牛, ヤギ	○	○	398	ナロー	113	○	B
3	West hanahai	○	○	牛, ヤギ	○	○	391	ナロー	137	○	B
4	Ka/gae	○	○	牛, ヤギ	○	○	414	グワイ, コー, ナロー	94	○	B
5	Bere	○	○	牛, ヤギ	○	○	297	コー	65	○	B
6	Matiao phuduhdu	○	○	牛, ヤギ	○	?	?	コー	×	×	?
7	Grootlaagte	○	○	牛, ヤギ	○	○	349	ナロー, マカウカウ	×	×	?
8	Tsaawe	○	○	牛, ヤギ	×	○	387	ナロー, マカウカウ	113	○	B
9	D'kar	○	○	(牛), ヤギ	×	○	346	ナロー, グワイ, ガナ	290	○	C
10	Kuke	○	○	(牛), ヤギ	×	○	575	?	339	○	C
11	Metsimantle	?	○	(牛), ヤギ	×	○	273	?	×	○	C
12	Molapo	○	○	ヤギ	×	×	202	ガナ	×	×	A
13	Metsamanou	○	○	ヤギ	×	×	?	ガナ	×	×	A
14	Monatse	○	○	ヤギ	×	×	?	ガナ, グワイ	×	×	A
15	Kikao	○	○	ヤギ	×	×	?	ガナ	×	×	A
16	Mothomela	○	○	ヤギ	×	×	?	ガナ, チラー, グワイ	×	×	A
17	Western Farms	?	○	(牛), ヤギ	?	?	240	ナロー	?	?	C
18	Chobokwane	?	○	(牛), ヤギ	?	?	309	?	?	?	C

- 注1) 配給されるトウモロコシ袋の量は、ボツワナ政府 food resources の資料で1987年10月の値である。  
 2) 小学校の覧の数値は、1987年9月の生徒数を示す。  
 3) (牛) は、牛の所有者が白人やツワナを示す。  
 4) 道路工事は、ボツワナ政府・道路オフィスにある工事人名簿、民芸品生産はハンシークラフト社の資料による。  
 5) 集落類型は図3のA, B, Cに対応する。

これらの人口分布からサンのみをとりだすことはできないが、現代のサンが1960年代の50人前後の人口を有するキャンプ生活と比べて、4~16倍の人口をかかえる集落に生活していることを示している。なお⑬メツアマノー、⑭モナツェ、⑮キカオの人口データが欠除しているのは、乾季に近く町に移り一時的に廃村になるからである。

表1は、県内の18箇所のサン・カラハリ混住集落における、サンの言語集団や生業複合の様態、小学校やクリニックなどの公共施設の有無などを示す。

まず言語集団からみていくと、①カデにはガナとグウィ、②東ハナハイと③西ハナハイにはナロ、④カガエにはグウィ、コー、ナロー、⑤ベレにはコーが住んでいる。また⑫モラポにはガナ、⑯トメローには、ガナやグウィの他にチラーの人々が居住している。

生業複合では、狩猟と家畜飼養と農耕はすべての集落にみられる。しかし①カデ、⑫モラポ、⑬メツアマノー、⑭モナツェ、⑮キカオなどのC.K.G.R.内の集落では、国の法律によって牛飼養が禁じられているためヤギ飼養のみが実施され、その他の集落では牛とヤギの両方が飼われている。なお⑨デカール、⑩クケ、⑪メツィマントルなどの( )内の牛は、白人やツワナの牛農

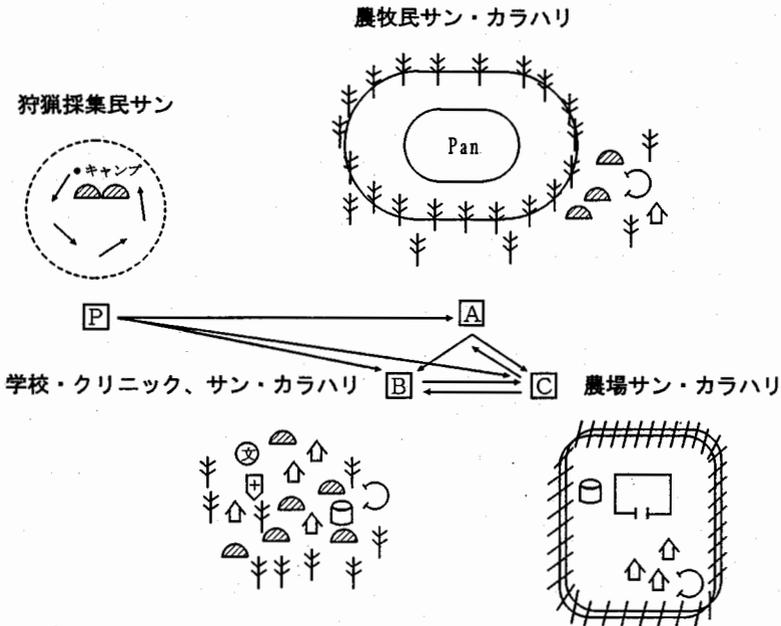


図3 カラハリ中部における集落類型とその形成過程

- (注)
- |            |         |
|------------|---------|
| ◐ サン型の家屋   | ⊡ 井戸    |
| ↑ カラハリ型の家屋 | † 低木    |
| ○ ヤギ囲い     | ⊙ 小学校   |
| ⊠ 牛囲い      | ⊕ クリニック |

(出所) 筆者作成

場で雇用されているために所有権のない牛のことを示す。道路工事や民芸品生産への従事は、①カデ、②東ハナハイ、③西ハナハイ、④カガエ、⑤ベレ、⑦ホロクラフトの6ヶ所の集落において両者とも実施されている。

小学校やクリニックの有無では、人口が349人の⑦ホロクラフトを除いて、①カデ、②東ハナハイ、③西ハナハイ、④カガエ、⑤ベレ、⑧ツァーウェ、⑨デカル、⑩クケなどの300人以上の人口を有する集落において両者がつくられている。小学校の生徒数では、クケの339人、デカールの290人を除いて、60～150人のあいだでのばらつきがみられる。

以上のように、ハンシー県内の混住集落には生業形態や公共施設の有無などの地域的差異がみられることから、筆者は、サン・カラハリ混住集落を次の3類型に分けて考えている(図3)。第1は、表1に示される⑫から⑮の事例のように、小学校やクリニックなどの公共施設はなく、道路工事や民芸品生産に従事する機会もなく、ヤギ飼養や農耕を生業にする「農牧民サン・カラハリ」集落(Aタイプ)である。第2は、①から⑤の事例のように近年になって年中利用できる水場の他に、小学校やクリニックなどが建設された「学校・クリニック、サン・カラハリ」集落(Bタイプ)である。第3は、⑨から⑪の事例のように白人やツワナの農場で牛を飼養するために雇用された人たちが住む「農場サン・カラハリ」集落(Cタイプ)である。この結果、遊動生活をするサンのキャンプ(Pタイプ)は、1987年現在のハンシー県内ではまったく存在しないことが明らかになった。

### Ⅲ. 中央カラハリ動物保護区(C.K.G.R.)の集落分布とその変遷

本章では、ハンシー県内の東部を占めるC.K.G.R.に対象地域をしぼって、集落分布を歴史的に把握する。

#### (1) イギリス保護領期(1885—1966年)のサン・カラハリ混住集落

1929年のクリフォード氏を隊長とする中央カラハリ探検の資料は、探検ルート沿いにキカオ(Kikao)、チュクドゥ(Chukudu)、コモディモ

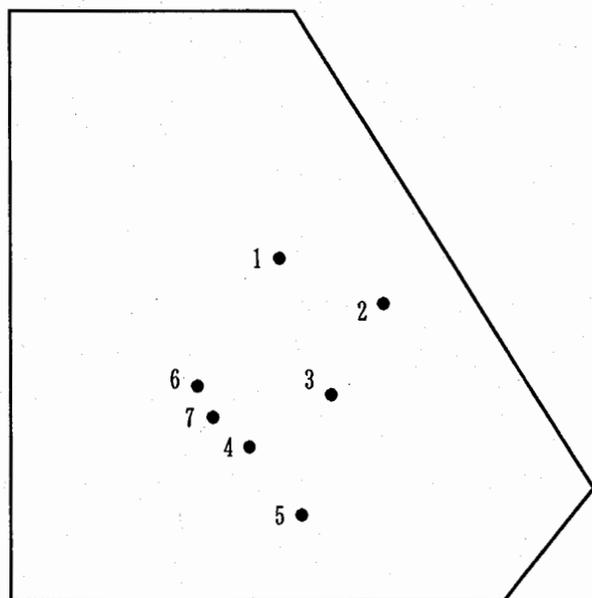


図4 1930年頃における中央カラハリ動物保護区(C.K.G.R.)の集落の分布

(注) 1 Molapo, 2 Koutou, 3 Metsamanong, 4 Menoatse,  
5 Kikao, 6 Chukudu, 7 Gomodimo  
□: 中央カラハリ動物保護区

(Gomodimo) などの集落が存在していたことを示している(池谷, 1994 b)。なおこれらは, 1961年に指定されたC.K.G.R.の南部に位置する(図4)。また筆者による古老への聞きとり調査では, 1930年頃にモラポ(Molapo), コウトウ(Koutou), メツアマノー(Metsamanong), メノアーツェ(Menoatse)などの集落の存在を確認している。これらの村の住民構成では, メツアマノーやキカオなどのようにカラハリが大部分をしめる集落もあるが, カラハリとサンから構成されている点では共通している。

その後, 1960年代の人類学的研究によると, 現在のカデを中心とした地域には, 集落をつくることなくキャンプ(バンド)単位で遊動するグウィ・サンの生活が報告されている(Silberbauer, 1981)。この時代の集落には, チュ

クドゥとコモディモを除いた上述の集落がみられたといわれるが、1962年に井戸がつくられたカデを除いて、降水時のみ水を貯えるパン（浅いくぼ地）に近接して集落は立地している。

## (2) 国民国家の形成期（1966—1994年）におけるサン・カラハリ混住集落

この時代の前半では、集落分布に大きな変化はみられなかったが、後半に地方行政の末端をになうC.K.G.R.の中心地としてのカデが形成された。その結果、C.K.G.R.のその他の集落へは、カデからの医療や教育サービスが提供されていった。

1970年代には、水をくみあげるポンプの油が不足することで、常時利用できる井戸ではなかったが、C.K.G.R.の西側のカデにサンが集まってきている。この時代のボツワナでは、牛肉の生産・輸出が国民経済の中心であったが（池谷，1994a），C.K.G.R.では牛飼養が禁じられていたので、地域開発の施せない地域となっていた。

1979年以降、ボツワナ政府による僻地開発がC.K.G.R.にも浸透して、井戸のあるカデが、C.K.G.R.の中心地として発展する（池谷，1994）。これによって、カデの井戸の近くに小学校、クリニック、雑貨屋などがつくられ、集落人口は約600人と急増していく（田中，1986）。

その一方で、イギリス保護領期にも集落のみられたC.K.G.R.の東部では、1980年代にボツワナ政府と提携したダイヤモンド会社デ・ビース（De Beers）による探索調査がおこなわれた結果、その会社がトメロー（Mothomela）やホーペ（Gope）に井戸を、バーペ（Baape）とホーペに調査キャンプをつくった。その結果、トメローとホーペの井戸の周辺には、ガナ、グウィ、チラーなどの様々なサンのグループやカラハリが集まるようになっていった。その後トメローの井戸は、1980年代後半より政府の管轄下におかれている。ホーペでは、現時点でも探索調査中ではあるが、現在のボツワナの国民経済をささえるダイヤモンド業の鉱山都市オラパやジュワネンなどのように、将来大きく発展する可能性をもっている。

この結果、デ・ビースによってC.K.G.R.内に格子状に一直線の道路がはり

めぐらされて、1950年代にシルバーバウアーがつくったといわれる曲がりくねった道路は使われなくなる。また野性動物局が自らの野生動物の調査や管理のため、密猟などの監視のために道路整備を実施する。

1991年の政府の人口センサスでは、中央カラハリ動物保護区の人口は、男が472、女が522の合計994人を示す。集落別の人口では、カデ(Xade)の528人(男254、女274)、モラポ(Molapo)の61人(男26、女35)、メツアマノー(Metsiamanong)の71人(男30、女41)、キカオ(Kikao)の98人(男48、女50)、トメロー(Mothomela)の149人(男60、女89)、バーベ(Bape)

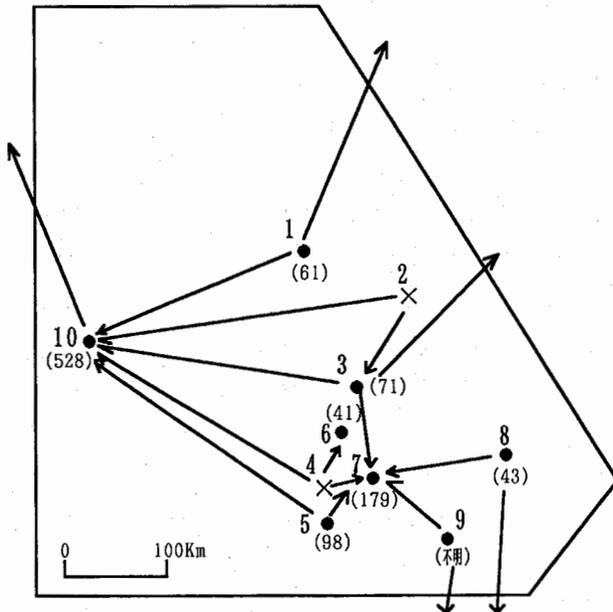


図5 1991年における中央カラハリ動物保護区(C.K.G.R.)の集落の分布と人口移動

(注) 1 Molapo, 2 Koutou, 3 Metsiamanong, 4 Menoatse, 5 Kikao, 6 Baepe, 7 Mothomela, 8 Gope, 9 Gukanba, 10 Xade

( )内は、1991年のセンサスによる人口を示す。×は廃村を示す。

←人口移動(1980—93年)

□：中央カラハリ動物保護区

の41人(男27,女14),ホーペ(Gope)の43人(男24,女19)と記録されている(Central Statistics Office, 1992, P196)(図5)。なお,グカンバ(Gukanba)に関しては記されていない。

以上の結果から,1991年においてC.K.G.R.内には8ヵ所の集落が存在していること(図5),最初に井戸の建設されたカデのみに小学校やクリニックなどの諸施設がみられることが明らかになった。

#### IV. 中央カラハリ動物保護区(C.K.G.R.)内の居住地の移動からみた集落の形成過程

図5の矢印は,筆者の聞きとり調査による1980~93年にわたるサンやカラハリの居住地の移動を示す。図5から,カデとトメローの2つの集落のみに人口集中がみられる。カデには,モラボ,コウトウ,メツアマノー,モナツェ,キカオから,トメローには,メツアマノー,モナツェ,キカオ,グーカンバ,ホーペから人が移動している。C.K.G.R.の外への人口移動は,カデ,モラボ,メツアマノーでみられる。移動の結果,コウトウとモナツェの集落は廃村になっている。

カデ住民の①氏から⑤氏までに聞きとり調査をした結果,カデ周辺の遊動キャンプからカデ定住地に集住化してきた人の多いことがわかった。①氏や②氏は,/tuimuという地名が付与された地域で遊動生活を実施していたが,1980年前後に水場のあるカデに移動してきた(P→B)。③から④までは,カデ周辺で遊動生活をしてきた人々が,ハンシー,クレ,デカールなどの農場に移り,その後カデに戻ってきている(P→C→B)。④から⑤は,カデに生活していたが,農場へ出ていった事例である(P→B→C)。こうして中央カラハリ動物保護区の中で広い後背地をかかえていたことや水場をもっていたことが,カデの人口が急上昇した原因であると考えられる。

このカデの事例をII章で述べた3つの集落類型にあてはめると,全体としては(P)から(B)へ移行する住民が最も多いが,(P)から(C)を経て(B)にもどるグループや,(P)から(B)を経て(C)へうつるグループ

も無視できないことが明らかになった。また農場への労働力の移動を通じて、(P) や (B) から (C) タイプの集落に流入している一方で、乾季の水不足の時には (A) から (B) や (C) への一時的な移動がみられている。以上の結果は、図3で示した集落の形成過程としてまとめられる。

かつての彼らの集落は、図3の (P) タイプの「狩猟採集民サン」か (A) タイプの「農牧民サン・カラハリ」であったと推察される。後者では、雨季に水の得やすいパンの周囲に家屋を作り、狩猟採集だけでなくヤギ飼養や農耕にも従事して、乾季にはその周辺で遊動生活が実施されていた。しかし、あるグループは農場へ出ていき、そこで住み込む人が生まれた。その一方、近年は小学校やクリニックがつくられて定住化がすすみ、人口も増えて道路工事や民芸品生産の仕事に従事する人もいる。しかし、(B) タイプの「学校・クリニック、サン・カラハリ」は今でも、年に一度ぐらい100mほど移動していることが注目される。さらに、この定住化サンの中には、農場へ移動する人がいる一方で、農場で働いていたサンの中には、かつての居住地に戻ってくるものがある。

また (A) から (C) の3類型が、ハンシー県内の主要な町を中心にして同心円上に展開されていることにも注目したい。県内のハンシー、ノジャネなどの主要な町の近郊には (C) の形態が分布し、その周辺には (B)、さらに交通不便な辺境には (A) の形態が広がっている。このためボツワナ政府は、辺境地域への各種のサービスのために多額の金がかかるために、(A) や (B) の一部の住民を (C) の近くに住ませる移転計画を進めている。

## V. まとめと考察

### (1) 3つの集落類型の相互関係

図3は、カラハリ中部における集落類型として、(P) 「狩猟採集民サン」、(A) 「農牧民サン・カラハリ」、(B) 「学校・クリニック、サン・カラハリ」、(C) 「農場サン・カラハリ」とその相互の関係を示している。この中で (P) は、メンバーが固定した定住集落ではなくメンバーの離合集散のみられる

キャンプを示す。従来の生態人類学の研究では、カデのサンは(P)「狩猟採集民サン」から(B)「学校・クリニック、サン・カラハリ」への単一な動きとして把握されてきた(田中, 1986)。しかし、中央カラハリ動物保護区内には、サン以外に多数の農牧民カラハリが居住していて、(A)「農牧民サン・カラハリ」の生活が広くみられること、彼らの生活史の中で(C)「農場サン・カラハリ」としての生活経験のある人が多いことなど、単一な動きとしては説明できない現象が数多く存在している。また現在でも(B)と(C)の間には、相互のいききがあるのが実状である。さらに(C)から(B)へうごいても(C)にもどるキャンプがある一方で、(B)から(C)へ移住した者が(B)にもどる事例もある。

以上のことから、3つの集落類型のあいだで相互の移動がひんぱんに生じていることこそが、サンやカラハリに共通する文化的な特徴ではないかと考えられる。つまり、彼らにとっての農場や中心地集落への移動は、私たちのイメージする永久的な居住地移動とは異なり、水や食料の心配のない所への一時的な移動であって、労働を長つづきできないことなどから、さらなる居住地移動をおこしていると考えられる。

## (2) 3つの集落類型とその形成要因

図6は、1885～1994年におけるカラハリ中部における集落類型別の人口変動を示す。イギリス保護領期の初期には、(P)「狩猟採集民サン」と(A)「農牧民サン・カラハリ」との併存状態であった。その後アフリカーナーによるハンシー農場の建設にともない、(C)「農場サン・カラハリ」が生まれる。その数は、1950年代にベチュアナランド南東部のロバツェに牛の屠殺場ができて、牛飼養の商品経済化がすすむ中で急増したものだと言われている(池谷, 1994b)。その後、1980年代には(C)「農場サン・カラハリ」から(B)「学校・クリニック、サン・カラハリ」への人口移動がみられたので、(C)は減少していったが、近年再び農場へもどる人も生まれている。つまり1966年から1994年までの国民国家の形成期には、(P)「狩猟採集民サン」の数が減少していきゼロとなり、(B)「学校・クリニック、サン・カラハリ」の数

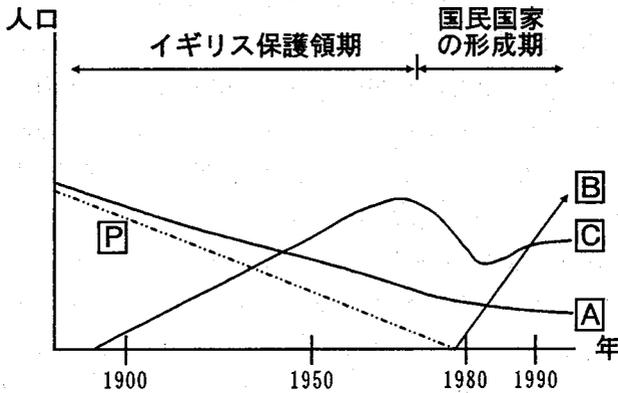


図6 カラハリ中部における集落類型別の人口変動  
[概念図]

(注) [P]: 狩猟採集民サン, [A]: 農牧民サン・カラハリ,  
[B]: 学校・クリニック, サン・カラハリ, [C]: 農場サン・カラハリ  
(出所) 筆者作成

が急上昇していく傾向がみられる。これは、カラハリ中部において、いわゆる狩猟採集民の生活様式である (P) タイプが、1980 年以降に消滅したとみてよいであろう。なお (A) 「農牧民サン・カラハリ」の数は、他の 3 類型とは異なり、過去 100 年間では減少しているものの、その社会変動は小さいものと思われる。

矢嶋 (1967, p 26) は、集落の成立や推移の姿に視点をおく場合に、“自然発生的集落”と“計画的開拓集落”の二大類型に分けて述べている。これを C.K.G.R. での集落分布の変遷史にあてはめてみると、カデ、トメローのような井戸を中心とする計画的集落と、モラポ、キカオのようなパンの周辺にできた自然発生的集落とに二分することができる。またカデは、ボツワナ政府の僻地開発 (池谷, 1994)、トメローは 1982 年以降のダイヤモンド会社の地域開発が作用している一方で、モラポやキカオの集落形成の要因は明らかになっていない。

筆者が住み込み調査をしてきたカデは、(B)の型が当てはまり、1960 年代

には伝統的な狩猟採集活動で生計を維持してきたといわれる (Tanaka, 1980)。しかし，上述した集落類型からみて，(P) タイプのほかに (A) 「農牧民サン・カラハリ」の型も共存していたのではないかと考えている。つまり，純粋な形での狩猟採集民もいたものの，ヤギやニワトリなどの飼いやすい家畜を飼育し，栽培スイカやササゲなどの簡単な農耕を行なう「ヤギ持ちサン」の存在があったと推察している (池谷，1991)。また，本稿では詳細に述べられなかったが，定住化がすすんでも，彼らの移動する行動様式はすぐには変わらず，カデ内で小刻みな移動が行われることを指摘しておく。

以上の報告を通して，自然との調和を保つ閉鎖社会としてとらえられるサンの社会は，C.K.G.R. の居住者の一部にすぎないこと，彼らの生活は，イギリス保護領期，国民国家の形成期における各時期の3つのタイプの集落との社会経済的関係なしには成立しえないことが明らかになった。

## 文 献

- Biesele, M., Guenther M., Hitchcock R., Lee, R., Macgregor, J. (1989):  
Hunters, Clients and Squatters: The Contemporary Socioeconomic  
Status of Botswana Basarwa. African Study Monographs 9, 109-  
151.
- Central Statistics Office (1992): Population of Towns, Villages and as-  
sociated Localities in August 1991. Ministry of Finance and Devel-  
opment Planning, Government Printer.
- Guenther, M. R. (1976): From hunters to squatters: Social and cultural  
change among the farm San of Ghanzi, Botswana. R.B. Lee and I.  
DeVore (eds.) Kalahari Hunter-Gatherers, 152-165. Harvard Univer-  
sity Press.
- Harpending, H. (1976): Regional Variation in !Kung Populations. Lee, R.  
B. and DeVore I. (ed.): Kalahari Hunter-Gatherers. Harvard Univer-  
sity Press.

- 池谷和信 (1989) : カラハリ中部・サンの狩猟活動 — 犬猟を中心として — .  
季刊人類学, 20 (4), 284-329.
- 池谷和信 (1991) : セントラル・カラハリ・サンのヤギ飼養について. 田中二郎・掛谷 誠編: ヒトの自然誌. 平凡社, 東京, 254-269.
- Ikeya, K. (1993): Goat Raising Among the San in the Central Kalahari.  
African Study Monographs, 14 (1), 39-52.
- 池谷和信 (1994 a) : ボツワナの僻地開発 — カデ地区の道路工事・民芸品生産をめぐって — . アジア経済, 35(11), 54-69.
- 池谷和信 (1994 b) : イギリス保護領 (1885—1966) 下の民族—カラハリ中部の事例—. 1994 年度人文地理学会大会研究発表要旨: 60-61.
- Ikeya, K. (1994): Hunting with Dogs among the San in the Central Karahari. African Study Monographs 15 (3), 119-134.
- Lee, R. B. (1979): The !Kung San: Men, Women, and Work in a Foraging Society. Cambridge University Press, Cambridge.
- Silberbauer, G, B. (1981): Hunter & Habitat in the Central Kalahari Desert. Cambridge Unibersity Press, Cambridge.
- 田中二郎 (1971) : ブッシュマン. 思索者.
- 田中二郎 (1986) : 集住化・定住化にともなう変化の過程. 伊谷純一郎・田中二郎編: 自然社会の人類学. アカデミア出版.
- Tanaka, J. (1980): The San, Hunter-Gatherers of the Kalahari : A Study in Ecological Anthropology. University of Tokyo Press, Tokyo.
- 矢嶋仁吉 (1976) : 村落、概説. 木内信蔵編: 都市・村落地理学. 朝倉地理学講座 9.
- Wilmsen, E. and J, Denbow. (1990): Paradigmatic history of San-speaking peoples and current attempts revision. Current Anthropology, 31, 489-524.